

## シュティフター『晩夏』(2)

鈴木善平

### Adalbert Stifters "Nachsommer". (2)

SUZUKI Zenpei

In dem Roman "Nachsommer" kann man zwei Nachsommer finden: den Nachsommer von Risach und den von Heinrichs Vater. Risach und Heinrichs Vater haben jeder einen anderen Liebeslauf gehabt.

Das späte Liebesglück, Nachsommer, wird durch eine eheliche Liebe gebracht. Die Liebe wird eine andere. Die eheliche Liebe in den späteren Lebensjahren ist von der früheren ehelichen Liebe verschieden.

#### 二つの Nachsommer

##### I

Nachsommer の意味について。

前号拙論「シュティフター『晩夏』(1)」において、小説『晩夏』の原題名 "Nachsommer" の意味を、「晩年に訪れたもう一度の愛の幸福」と定めた。今回の拙論を始めるに当り、必要上、Nachsommer の意味についての前回の考察を簡単に繰返したい。

Nachsommer の意味とその類義語 Spätsommer の意味とを、いくつかの辞書類によって比較対照すると、Spätsommer の意味に特徴的な語は、「終り (Ende)」もしくは「最後の (letzt)」であり、一方 Nachsommer の意味に特徴的な語は、「もう一度 (noch einmal)」であることが知られる。

Spätsommer が、夏の「終り」、夏のうちの「最後の」部分であるのに対して、Nachsommer の方は一 Spätsommer と同じ意味にも用いられるが一夏が終って秋になってから「もう一度」現われた夏日である。また、Nachsommer の方には特に、「晩年に訪れた愛の幸福 (spätes Liebesglück)」という比喩的意味がある。

Nachsommer の意味の中の「もう一度」と、比喩的意味「晩年に訪れた愛の幸福」とに基づいて、『晩夏』の中のリーザハとマティルデの晩年の再会と愛の物語りと、シュティフター自身のフランチスカ・グライブル体験とを考え合わせるとき、次のことが推定される。シュティフターは、フランチスカの若

き死によって望むべくもなくなったフランチスカとの再会とそれに続くもう一度の愛を、リーザハとマティルデの再会とそれに続くもう一度の愛を描くことによって実現させたのであろう。それゆえ、題名 "Nachsommer" の意味は、「晩年に訪れたもう一度の愛の幸福」ということになろう。

拙論『晩夏』(1) では以上のように考えた。しかるに小説『晩夏』の中には、このリーザハの Nachsommer のほかに、ハインリヒの父の望む Nachsommer がある。今回はこの両者について考えたい。

##### II

リーザハの Nachsommer。

『晩夏』の主人公若いハインリヒは、旅の途中雷雨を避けようとして、とある丘の上の家を訪れて雨宿りを請う。これが縁となって、ハインリヒとその家の主人、『晩夏』のもう一人の主人公、老リーザハとの交際が始まる。ハインリヒはしばしばリーザハを訪ね、その家に滞在し、リーザハから多大な感化を受ける。

リーザハは学生のとき家庭教師として良き評判を得ていた。彼はある教養のある富裕な家庭に迎えられ、そこに住みこみ、その家の男の子の家庭教師となる。リーザハは家族の人々と打ちとけ、いつしかその男の子の姉マティルデと愛し合うようになる。二人は互いに愛を告白し、はげしい恋におちいる。この恋は誰にも知られなかった。しかしハインリヒが、マティルデの母に打明けて父の同意を願い出た

とき、まだ二人とも若すぎると反対された。マティルデが一人前になり、リーザハが社会的に独立して将来のための地位を固めてから、考えるべきことである、と。

リーザハはこの両親の意に従いこの恋を断念する。そしてマティルデにも両親に従うよう求めた。マティルデは、リーザハのこの断念を裏切りだとして激しく非難した。リーザハはその家去る。

彼がこの家に来てからまる2年、マティルデと愛を告白しあってから1年たらず、短くはあったが、しかし激しい愛の夏の日々であった。その夏が終わったのである。

リーザハは官吏になり、職務に励み、数年後相当の地位を得る。彼は人を介してマティルデに、愛の変っていないことを伝えたが、マティルデからは、リーザハを軽蔑している旨の返事が伝えられて来た。「もう一度」と願ったリーザハの願いは、今はかなえられなかったのである。

リーザハは官吏の道を進み、功績を挙げ、男爵の位を授けられる。マティルデはかなりの年になってから結婚し、二児を得て夫を亡くす。リーザハも結婚し、2年後妻を亡くす。

リーザハは、官吏の勤めが自分に合わないことを悟り辞職する。彼は晩年のために別荘をつくり、自然と芸術に親しみ、農園と家具工房を経営し、近隣の人々の役に立つ仕事をするに努める。リーザハはバラを栽培して、その家をバラの花でおおうようにした。その昔、マティルデの家のあずまやと庭がバラの花でおおわれていたからである。

長い年月ののち、一人の婦人が男の子をつれてリーザハの家を訪れ、バラの花の前に立つ。マティルデであった。マティルデはリーザハに許しを請う。年老いた二人は涙を流して抱擁し、二人の心は深い愛にふるえた。マティルデは息子にグスタフという名前をつけていた。リーザハと同じ名前である。

こうして二人は再会し、愛の幸福の時が始まる。リーザハはマティルデの息子グスタフを、自分の手もとにおいて教育する。マティルデは娘ナターリエをつれて、度々リーザハの家を訪れる。リーザハの言葉。

親しい交際が展開しました。グスタフは私に親しみ、私も彼に親しみました。親しさの中から愛が生まれました。マティルデは私の家政に助言

し、私は彼女の財産の管理に助言しました。ナターリエの教育について私たちはたびたび話しあい、取りきめた方針を実行しました。こうして互いに助けあっているうちに、私たちの愛情が強められました。互いに持っていて一度も消えなかった愛情、それは高貴で深く親密な感情となっていたのですが、これからは誰はばかることもなく正しく存続できることになったのです。私は愛することのできる人を再び得ました。Ein freundlicher Verkehr hatte sich entwickelt. Gustav hatte sich an mich gewöhnt, ich an ihn, und aus der Gewöhnung war Liebe entstanden. Mathilde gab Rath in meinem Hauswesen, ich in der Verwaltung ihrer Angelegenheiten. Nataliens Erziehung wurde oft zwischen uns besprochen, und Schritte gethan, die wir verabredet hatten. Und in der gegenseitigen Hilfeleistung stärkte sich die Neigung, die wir gegen einander hatten, die nie verschwunden war, die sich zu einem edlen, tiefen, freundlichen Gefühle gebildet hatte, und die nun offen und rechtmäßig bestehen konnte. Ich hatte wieder Jemanden, den ich zu lieben vermochte<sup>1)</sup>.

リーザハの Nachsommer、「晩年に訪れたもう一度の愛の幸福」が始まったのである。

マティルデと私の間には、何か特別な関係がありました。男を女の所へ導く火のような嵐のような愛の日々のあと、静かな全く誠実な甘美な友情として現われる、夫婦の愛というものがあります。それはすべての称賛すべての非難を超越しています。それはひょっとしたら人間の諸関係が示すものの中で最も清らかなものでしょう。この愛が始まったのです。(中略)こうして私たちは、落着いた幸福の中に、いわば先行した夏のない晩夏を送っているのです。

Zwischen Mathilden und mir war ein eigenes Verhältniß. Es gibt eine eheliche Liebe, die nach den Tagen der feurigen gewitterartigen Liebe, die den Mann zu dem Weibe führt, als stille, durchaus aufrichtige, süße Freundschaft auftritt, die über alles Lob und über

allen Tadel erhaben ist, und die vielleicht das Spiegelklarste ist, was menschliche Verhältnisse aufzuweisen haben. Diese Liebe trat ein. (. . .) So leben wir in Glück und Stetigkeit gleichsam einen Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer.<sup>2)</sup>

前号拙論(1)で述べた如く、「先行した夏のない晩夏(einen Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer)」とは、夏のなかったNachsommerということではないと考える。というのは、上にあるように、「火のような嵐のような愛の日々」という夏があったのだからである。先行した夏のないNachsommerとは、夏に続かないNachsommer、すなわち、夏が終わってすでに秋に入ってからもう一度やって来たNachsommerのことである。リーザハとマティルデには、火のような嵐のような愛の日々のあと、別れがあり、再会があって、今このNachsommerを過ごしている。

そしてこのNachsommerの中で、ハインリヒとナターリエの若い二人が結ばれて行く。

### III

ハインリヒの父のNachsommer。

ハインリヒの父が、自分もリーザハさんのようにNachsommerを持ちたいと思うと、ハインリヒに語る言葉。

事務室での仕事の情熱が次第に湧いて来たが、今はしかしそれに別れを告げようと思う。そしてただ私の大したこともない遊びごとだけに生きるつもりだ、私も晩夏を持つために。お前のリーザハさんのように。

Jetzt aber will ich der Schreibstubenleidenschaft, die sich nach und nach eingefunden, Lebewohl sagen und nur meinen kleineren Spielereien leben, daß ich auch einen Nachsommer habe, wie Dein Risach.<sup>3)</sup>

リーザハが自分のNachsommerについて語ったとき、彼は Spielereien のことに触れていた。マティルデとの再会後の愛について語ったあと、彼は次のように云った。

この愛が始まったのです。(中略)私たちは落ち着いた幸福の中に、いわば先行した夏のない晩夏を送っているのです。私の収集品は完全にそろいます。建築物はますます多く仕上がります。私は人々を私の所へひきつけました。私は私の他の全生涯で学んだよりも多くのことをここで学びました。遊びごとには然るべく進んでいます。そして何か少しは私もやはりまだ役に立っています。

Diese Liebe trat ein. (. . .) So leben wir in Glück und Stetigkeit gleichsam einen Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer. Meine Sammlungen vervollständigen sich, die Baulichkeiten runden sich immer mehr, ich habe Menschen an mich gezogen, ich habe hier mehr gelernt, als sonst in meinem ganzen Leben, die Spielereien gehen ihren Gang, und etwas Weniges nützte ich doch auch noch.<sup>4)</sup>

ハインリヒの父は、リーザハが遊びごとに生きていることを知っている。この二人は、会う以前からハインリヒを通して互いに知り合っていた。二人は絵画、彫刻、美術工芸品等の収集や鑑賞において互いに競い合い、互いに相手を高く評価し尊敬しあっていた。ハインリヒの父は、これらの遊びごとにおいてリーザハとの共通点を見出していた。それで彼は言う。リーザハさんのように遊びごとに生きて、そしてリーザハさんのように私も晩夏を持つのだと。

ハインリヒの父が、自分もリーザハのようにNachsommerを持つのだと言うとき、彼はすでにリーザハとマティルデのことをハインリヒから聞いて知っている。ハインリヒの父の持つであろう晩夏は、しかし、リーザハの過ごしているNachsommerと同じではない。繰返し言うように、リーザハのNachsommerは、マティルデとの再会によって得られた、晩年に訪れたもう一度の愛の幸福である。これに対してハインリヒの父と母とは、別れは考えられず従って再会ということがあり得ないから、そのNachsommerにおける愛の幸福は、「もう一度」のそれではない。

## IV

結び。変化して存続する愛。

リーザハの場合とハインリヒの父の場合とで、違うところがもう一つある。それは、ハインリヒの父は家庭を持っているがリーザハにはそれがないという点である。

ナターリエに求婚するために、ハインリヒの家族がリーザハたちを訪れたとき、リーザハはハインリヒの父に次のように言っている。

あなたは常に活動が続けられ、堅実な家庭を持っておられる、名誉ある尊敬すべき方です。私はそのどちらも持っておりませんが、もしそれだけの値打のある人間とお考えでしたら、どうか私を心の友としてくださって、人生最後の日目を、ともどもに、親しくすごして参りましょう。

Ehrevoller, würdiger Mann einer stetigen Thätigkeit und eines wohlgegründeten Familienlebens, wenn Ihr mich, der ich beides nicht habe, für werth erachtet, so kommt an mein Herz und laßt und die letzten Lebens-tage freundlich mit einander gehen.<sup>5)</sup>

ハインリヒの父は活動と家庭を持っているが、リーザハはその両方共持っていない。しかしやがてハインリヒの父も活動から身を引くので、両者の違いは、ハインリヒの父は家庭を持っているがリーザハは持っていないという一点となる。言いかえれば、ハインリヒの父と母は夫婦であるが、リーザハとマティルデは夫婦ではないという違いである。

再会したマティルデさんとなぜ結婚していないのですかというハインリヒの問いに、リーザハは答えて、

その時機はもうすぎ去りました。そのような間柄はもう楽しくはなかったでしょうし、マティルデもおそらく一度も望んだことがないと思います。

“Die Zeit war vorüber,” antwortete er, “das Verhältniß wäre nicht mehr so schön gewesen, und Mathilde hat es auch wohl nie gewünscht.”<sup>6)</sup>

リーザハとマティルデの二人は、近くではあるが別々に家を持ち、この拙論のIIで見たように、互いに家政や財産管理について助言しあい、子供の教育について話しあうなど、互いに助けあって互いの愛情を強めて行った。

それは利己心のない切なる愛なのです。相手と共にいることを喜び、日々の生活を美しいものにし、それをいつまでも続けることに努めるのです。それはこの世ならぬ優しい感情です。マティルデは私の仕事のすべてについて関心を持っています。(中略)私は彼女の家の様子を確かめ、(中略)彼女の希望や意見を聞き、子供たちの教育や将来を心に留めています。

Sie ist innig ohne Selbstsucht, freut sich, mit dem Andern zusammen zu sein, sucht seine Tage zu schmücken und zu verlängern, ist zart und hat gleichsam keinen irdischen Ursprung an sich. Mathilde nimmt Antheil an jeder meiner Bestrebungen. (. . .) Ich sehe in ihrem Hause nach, (. . .), nehme Theil an ihren Wünschen und Meinungen und schloß die Erziehung und die Zukunft ihrer Kinder in mein Herz.<sup>7)</sup>

我々は、リーザハとマティルデの二人の「互いに持っていて一度も消えたことのなかった愛情」が、ここに变化した形で存続しているのを見る。リーザハは、「男を女の所へ導く火のような嵐のような愛の日々のあと、静かな全く誠実な甘美な友情として現われる、夫婦の愛というものがあります。」と言った。夫婦の愛というものの中には、若いときの、男を女の所へ導く火のような嵐のようなものから、長い年月ののち、静かな全く誠実な甘美な友情として現われるものへと、変化して存続するものがある。このような友情としての夫婦愛の中に、今リーザハとマティルデはいる。たとえ結婚しておらずそれゆえ一つの家庭のなかにはいないとはいえ。

一つの家の中のなかにあるハインリヒの父の場合はどうであろうか。

ハインリヒとナターリエの結婚式のあと、新婦ナターリエが、将来とも変ることのない愛を願う気持ちから、ハインリヒはきつとずっと今日と同じままで

いるでしょうと言ったとき、ハインリヒの母は、いいえと答える。

今のままでいることはないでしょう。あなたは今はまだわかっていないのです。彼が今以上になるでしょう。そしてあなたが今以上になるでしょう。愛は別のものになります。長い年月がたつと、愛は全く別のものになっています。けれども年毎に大きくなっています。もしあなたが、今こそ私たちは最も愛しあっていると言うならば、それは間もなくもう本当ではなくなります。そしてあなたがいつの日か、うら若い青年ではなくて、老人を前にするとき、あなたは、青年を愛したのとは違った愛し方で彼を愛します。けれども若いときよりも、口では言えないほどもっと愛するのです。もっと忠実に、もっと真剣に、そしてもう誰も引離せないように。Er wird nicht so bleiben, das weißt Du jetzt noch nicht: er wird mehr werden, und Du wirst mehr werden. Die Liebe wird eine andere, in vielen Jahren ist sie eine ganz andere; aber in jedem Jahre ist sie eine größere, und wenn Du sagst, jetzt lieben wir uns am meisten, so ist es in Kurzem nicht mehr wahr, und wenn Du statt des blühenden Jünglings einst einen welken Greis vor Dir hast, so liebst Du ihn anders, als Du den Jüngling geliebt hast; aber Du liebst ihn unsäglich mehr, Du liebst ihn treuer, ernster und unzerreißbarer.<sup>8)</sup>

ハインリヒの父は、妻のこの言葉を聞いて、わきを向き眼に手を当てた。感慨と感動のあらわれであろう。

小説『晩夏』は、ハインリヒの父と母の若き日々

については語ってはいない。しかし上に引用した言葉で、母が「あなたは今はまだわかっていない」と言っているのを見ると、母にはわかっているのである。従って上に述べられたことは、とりもなおさず、ハインリヒの父と母の夫婦愛の変化を言い表わしているものと解することができる。

小説『晩夏』にあらわれる二つの Nachsommer は、共に、一つの夫婦愛による晩年の愛の幸福である。その夫婦愛は、長い年月にわたって、変化しつつ存続して来た。それは、リーザハとマティルデの場合のように、かつて別れがあり今も結婚せず夫婦になっていなくても、またハインリヒの父と母の場合のように、堅実な家庭にある夫婦であっても、若い時から消えることなく存続して来た夫婦愛であり、しかし同時に、若い時のほげしい夫婦愛とは違ったものとなった、晩年の夫婦愛である。

#### テキストと参考文献

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VIII 1. Hälfte, Gerstenberg Hildesheim, 1972. 以下, SW VIII と略記する。

藤村 宏: シュティフター 晩夏 集英社, 東京, 1960. 引用した訳文はこの書による。但し必要に応じて部分的に逐語訳とした。以下, 晩夏とのみ記す。

#### 注

- 1) 晩夏 446 f. SW VIII 170.
- 2) 同 447 f. 同 172.
- 3) 同 483. 同 233.
- 4) 同 447 f. 同 172.
- 5) 同 461 f. 同 197.
- 6) 同 450. 同 176.
- 7) 同 447 f. 同 172.
- 8) 同 472 f. 同 217 f.

(受理 昭和63年1月25日)